

<書評論文>

不可能な身体

C. Holmlund,
Impossible Bodies: Femininity and Masculinity at the Movies
 (Routledge, 2001)

ゲバ・ヤナイ

私たちが映画のスクリーン上で目にする身体は、自分たちの日常においてリアルではないという意味で、私たちにとっては、獲得「不可能な」ものだ。そもそも、イメージと音によって形づくられているそれらの身体は、同時に、ナラティヴを通して構築される存在なのだ。

画面上に現れるこれらの身体とは、いったい何なのか。本書を通じて著者は、「身体」という語を異なる文脈で用い、そうすることにより、異なる解釈を与えている。それは、実際に目に映る物理的な身体であることもあれば、他の場合においてはイメージであり、表象でもある。すなわち、著者は、「身体」という語はアンビバレントなものであると考えている。この語を用いることによって、著者は広範囲に渡る問題——現代のハリウッドの周縁におけるエスニシティ、ジェンダーそしてセクシュアリティ——に取り組もうとするのである。

ここで著者について、簡単に触れておこう。本書の著者、クリスティン・ホルムランドは、テネシー大学ノックスビル校の助教授で、映画論、女性学およびフランス語を教えている。主要研究分野は映画、映画理論、フェミニスト理論、ポストコロニアル理論、クワイア理論およびカルチュラル・スタディーズである。

本書のタイトルは、日本語にすれば「不可能な身体」となる。ここで著者が、「不可能な」という言葉を使うことによって意味しようとしているのは、画面に映し出される身体が、ほとんどの観客には入手不可能であるということである。

著者は、この「不可能な身体」という表現を、ふたつの異なる意味において用いている。

第一には、ボディビルダーやクリント・イーストウッドの例（第一章、第三章）によって示されるように、物理的に不可能な身体という意味である。第一章で紹介されるボディビルダーたちの特異性は、ボディビルディングというスポーツ／趣味に関与する人々の小さな輪のなかでも、際立ったものである。クリント・イーストウッドに至っては、その希少性は絶対的だと言える。彼が映画のなかで見せるような引き締まった肉体を持つ人を、彼の同世代人のなかに多数見つけることは容易ではないだろう。彼の身体は、まさに、欲望の対象としての、理想的で男性的なものであるとともに、一般の観客にとっては不可能な身体なのである。

第二の意味は、第二部のスウェーデン人の例において使われている「不可能性」である。ここで強調される「不可能性」は、クリント・イーストウッドの例にみられたような身体の肉体的な要素にかかわるものではない。北アメリカにおけるマイノリティ・グループと、その映画における表象にかかわる問題なのだ。つまり想定されている観客のエスニシティとしての「白人性」から逸脱しているがゆえに（後にふれるように、スウェーデン人は、しばしば真性の「白人」としては扱われていない）、（想定される白人の）観客にとって、彼ら彼女らは、獲得不可能な身体をもっていると考えられるのである。

以下、これらの問題について著者がどのように述べているかを示していく。

今日においてもなお、動作は多いが口数は少ないアクション映画の登場人物——たとえばシルベスター・スタローンやアーノルド・シュワルツネガーなどの——は、ハリウッドの映画スターとして、世界中で視聴者を喜ばせている。その理由は他でもない、著者によれば、それは、「彼らが私たちとは違うからだ」。

ハリウッド映画の大多数は、ジェンダーを前面に出している。どのジャンルの映画も男性と女性のキャラクターによって構成されており、人気スターたちが、なじみ深い仲間をサポートされながら、そうしたキャラクターを演じ、男女の観客に語りかける。著者のホルムランドは、視聴者を映画の内容に共感させるためには、アメリカ社会が容易に受け入れられるような「ドメスティックな」問題を盛り込む必要があると考えている。しかし映画を観るのはアメリカ人あるいはアメリカの生活になじみがある人だけではなく世界中が観ることになるのだ。

前世紀のアメリカ映画産業において、80年代、90年代は、身体がそれ以前よりも「適切な」、「自然な」、そして「一般的な」かたちで現れるようになった時代である。しかし、多くの身体は今もなお不可能なままだ。なぜ不可能かといえば、それらの身体は私たちが「普通」と考える体格の範囲を超えているからだ。

こうした観点から、著者は、ポピュラー映画がどのように現代的価値の市場あるいは伝

達手段として機能するのか、考察を試みる。彼女が主に対象としているのは既にビデオやレーザーディスク、DVDといったかたちで入手可能となっている作品、また、アメリカのテレビでよく放映される作品である。なかでも、著者が強調し、注意を払っているのは、過去20年間に製作された長編フィクション映画である。

本書は三部構成をとっている。

第一部では、1980年代、1990年代のドキュメンタリー映画、ロマンス映画、ウェスタン映画を対象とし、不可能性の異なる用法（仕組み）を考察している。願望の対象となる身体の表象と、映画に現れる男性と女性のイメージが扱われる。

ホルムランドの考えでは、これらの映画は、既存の男性らしさや女性らしさの概念を強化するものである。たとえば、男性と女性のボディビルダーについてのドキュメンタリー映画があるが、これがドキュメンタリーとして呈示される以上、視聴者はそれを「真実」として受け入れることとなる。したがって、理想的な男性身体とは、ボディビルダーのそれということになる。しかし、そんな体の持ち主はあまりいないということは言うまでもないことだ。また、たとえそれに近い体格の持ち主であったとしても、映画のなかの競争者には比べるべくもないと、著者は、論じている。

この章で著者は、ハリウッド映画におけるレズビアン表象、そして1990年代の映画界に出現した新しいかたちのアメリカン・ウェスタン映画についても議論している。

本書の第二部は、映画界のサブ・グループを扱っている。サブ・グループとは、映画のなかでは通常、仲間の役割を果たすもので、たとえば「殺人的なお人形さん」（美しく魅力的だが暴力的で、男性を殺すこともある女性）、スウェーデン人、ラテン系などが挙げられる。スウェーデン人役者は過去も今もハリウッドの一部を成す存在であるが、しかし、その役割は常に「他者」のものである。スウェーデン人がスウェーデン人を演じることはなく、彼らはアメリカ社会の一部であると同時に、決して正式なメンバーではない。ラテン系の俳優は映画に姿を見せるものの、ステレオタイプの役を演じ、多くの場合その身体的な魅力によって存在していると言えると、著者は、述べている。

最終部である第三部では、私たちの多くがファースト・ネームだけで分かるハリウッドの大スターたち——たとえばウーピー（ゴールドバーグ）、クリント（イーストウッド）、そしてドリー（パートン）など——について論じている。これらの人物に偽の「親近感」を抱いている視聴者は、「身体」の差異には気づかない。ウーピーは強い黒人女性かもしれないが、同時に、ハリウッド全体で彼女の規模の映画スターとなった黒人女性は他にいない。クリントは年老いているが、映画のなかではいつまでも若く見えるし、ドリーは強いけれど、きわめて人工的なプロポーションの身体をしている。

当然ながら私たちの多くは、ハリウッドが提案するような理想的な身体、あるいは「普通の」身体さえも持つてはいないとホルムランドは述べている。しかし、外見は往々にして社会的受容に結びつき、また、政治的権力や影響力とも無関係ではないから、「常軌を逸した」外見や身体が現れる。私たちが自身に関して映画から吸収しようとするには、常に妥協がつきものだ。私たちはより広い社会的・経済的ファクターによって拘束されているが、しかし同時に、ハリウッド映画は少しでも多くの人にあいまいな約束を与えようとする。以上が著者が本書の中で述べていることの紹介であるが、以下に詳しくみていきたい。

本書の第一部は、ハリウッドにおいては、ジェンダーに関する望ましさがいかにイメージされているか、そして、それが映画のなかでいかに維持されるか、が論じられている。

ここでは、ボディービルダーや、一般人よりも良い体形をしている映画スターなどの、鍛えられた体格に焦点が当てられる。著者の手法は、ふたつのドキュメンタリー、『Pumping Iron』（George Butler, Robert Fiore監督, 1977年）と『Pumping Iron 2: the woman』（George Butler監督, 1984年）の映画分析である。

ボディービルディング大会は、アメリカにおける身体、願望そして権力のあいだの関係をみるのに理想的な場である。私たちが身体を見る、そして語る方法は、歴史的に変化するものだ。著者によれば、私たちは自らが創り出し変えていく社会的環境のなかで生きている。したがって、私たちの自己および他者に対する意識は時とともに変化する。別のことばで言うなら、60年代の産業社会が人間身体に関して鷹揚だったのに対して（Foucault 1980）、今日では、製品を売り、マス・メディアにブームを起こす必要があるために、私たちは社会が必要としている身体というものを異なったかたちで認識する。過去、あるいは歴史上の別の地点において身体が呈示された様式というのは、現在とは異なっているのだ。社会が理想とする身体が変化すれば、それがより強調されることになる。現在の私たちの社会においては、望ましいイメージに対する意識が、そして「より良い」身体への受容が高まっている。その背後には、過去にはなかった領域への、新たなかたちでのマス・メディアの広がりがある。

『Pumping Iron』は、1976年のミスター・オリンピア大会の記録である。この映画では、筋肉質な体形の男性が「自然」だと見なされている。筋肉質であることが力の象徴であると、大会参加者のあいだでも、そして映画の視聴者にも理解されている。筋肉質な男性はただ強いだけでなく、性的でもある。男性性にも強い結びつきがある、すなわち、力強ければ力強いほど男性的だ、とされる。

映画の観客もミスター・オリンピア大会の観客も、アーノルド・シュワルツネガーがコ

ンテストに勝つべきであり、そうなるだろうと信じて疑わない。彼こそが、もっとも筋肉質で、明瞭で、精力的なアーリア人なのだ、と。

男性大会においては、優勝者について言われたことのすべてが自明視されているが、女性版である『Pumping Iron 2』においては、筋肉質な女性のイメージは不快と脅威を感じさせるものである。『Pumping Iron』が筋肉質な男性の側に立つものであるいっぽう、『Pumping Iron 2』は筋肉質な女性を賛美するものではない。女性がボディービルディングに参加するか否かについては、きわめてあいまいな、どっちつかずな態度がとられている。

『Pumping Iron』のなかでは、「男性とは何か」という問いかけはない。なぜなら、映画制作者たちにとって答えはあまりにも明らかなからだ。『Pumping Iron 2』の中心的な問いは、「女性とは何か」である。映画全編を通して、筋肉質な人間身体に対する男性側のアンビバレンスが現れている。

両映画とも、ボディービルディングのコンテストについてはほぼ等しい扱いをしているように見える。しかしより深いレベルで考察してみると、人々が男性身体を見る方法および女性身体を見る方法には、既存の概念や前提があることがわかってくる。男性があるべき姿、女性があるべき姿を踏襲しなければならないのだ。ドキュメンタリーではあるが、『Pumping Iron 2』では大会参加者たちの私的な部分も暴露され、彼女らの男性との関係や、より女性的な身体をしているのは誰かといったことも扱われている。

ここには、男性的身体と女性的身体のあいだの可視的差異がなくなることへの恐れがある。女性と女性的イメージは追究の対象となるが、男性については答えはすでにわかっている。女性の問題であり、不安の種であり、執拗な探求の対象である。男性はそうではない。

本書の第二部では、周辺的な登場人物の身体に光があてられる。男性に対して暴力的な振る舞いをする美しい女性や、「非アメリカ人」を表象するスウェーデン人俳優、はっきりそれとわかるが、その役柄は女中という脇役でしかないラテン系女優たちである。

例として、著者はスウェーデン人男性というカテゴリーに注目している。

20世紀初頭には、現在私たちが「エスニシティ」あるいは「ナショナルリティ」として考える集団は、一般的に「人種」という語で表されていた。「アングロサクソン人種」、「北欧人種」、「アーリア人種」、「日本人種」など (Higham 1988)。今日、北アメリカの白人にとって、エスニシティとは、国籍あるいは文化にかんする遺産に自らを帰属させる自発的な態度を意味する。

アメリカの一般的な想像においては、スカンジナビア人、ドイツ人、そしてアングロサ

クソン人が、依然として理想的な「白人」である。しかし、画面上では、スウェーデン人の男性身体は二重に「不可能」なのである。というのも、スウェーデン人が画面上でスウェーデン人を演じることはなく、そしてスウェーデン人の登場人物は常にアングロ系アメリカ人主役の下位におかれているからだ。

アメリカ社会において、スウェーデン人は白人であり、非白人のアメリカ人よりもよりアメリカ的であると考えられているかもしれない。しかし、アメリカ人の白人層のなかで彼らは「他者」として認識されている。それは、彼らが、アングロ系ではない、ということからであると著者は考えている。

ハリウッドにおけるスウェーデン人のなかでも、重要な例として次の人物たちを挙げることができる。1920年代から1930年代において主に東洋人の役を演じたニルス・アスター、1980年代、1990年代のアクション映画においてアメリカ人、ドイツ人、ロシア人を演じたドルフ・ラングレン、1950年代、1960年代のウェスタン映画においてばかげた仲間としてのスウェーデン人を演じた、スウェーデン人でない俳優たちである。

ハリウッドの白人中心主義は、一般的なアジア不信と結合していたと著者は言う。その結果多く作られたのが、アジア人の登場人物が現れる無声映画および初期有声映画であった。これらの人物は「イエロー・フェイス」の白人俳優によって演じられることが多く、白人の登場人物と比べて不幸で不健康で不平等な関係にあると、ネガティブな存在であった。当時、アジアを演じたなかでもっとも有名だったのが、ニルス・アスターというスウェーデン人であった。彼は外見上は白人だが、非白人でもあった。文明人であると同時に野蛮であり、西洋人であると同時に東洋人であったのだ。

1950年代になると突然、ウェスタン映画の脇にスウェーデン人が出現するようになった。それまでには姿を現すことのなかった彼らが登場し始めたのは、ヨーロッパ系移民の第一および第二世代のなかで、以前は「エスニック」とされていたことが意味を失い始めたからである。アングロ系のアメリカ人以外の登場人物も、オープンに映画に出るようになった。スウェーデン人の登場人物（スウェーデン人自身によっては演じられていない）が、メキシカンやネイティヴ・アメリカンを助けるアメリカの農夫として現れるようになった。映画に登場する他のマイノリティと同様に、スウェーデン人男性は常にアングロ系のガンマンの影にいる。たとえば、アングロ系アメリカ人のカウボーイが外で戦っているあいだ、小柄な「スウェーデン人の」農夫たちは家のなかに隠れている、というふうに。

1980年代、1990年代のアクション映画では、ドルフ・ラングレンがもっとも有名なスウェーデン人俳優だろう。ほとんどの映画において、主に彼の相手となるのは他の白人だが、アングロ系アメリカ人ではない。彼の役柄はロシア人からドイツ人、混血にまで至るが、

スウェーデン人を演じることはない。国籍がはっきりしない場合にも疑問を抱く余地は常にあるのだが、アングロ系アメリカ人だということが漠然と示唆されている。

彼は、他の白人と対決する際に、「他者」（アフリカ人、アフリカ系アメリカ人、アジア人、アジア系アメリカ人）の習慣や知識を真似て用いる。

著者によれば画面上のスウェーデン人男性は、「白人性」というものがいかにあいまいで不安定なものを明らかにするという。彼らはアメリカ人でありながら、決してアメリカ人ではないのだ。スウェーデン人だが、スウェーデン人ではない。彼らは「他者」なのであり、「他者」の習慣を吸収し、そしてアングロ系アメリカ人の影にいる。

本書の第三部では、著者はハリウッドの著名人三人について論じている。そのすべてが身体を特徴としている。ウーピーは黒人だし、クリントは年配だが老人の体つきをしていない。ドリーの身体は、度重なる手術の成果だが、今や不自然にさえ見える。

著者がクリント・イーストウッドを選んだのは、現在も映画に出演しているハリウッドの有名俳優のなかで、最高齢のグループに彼が属するからである。彼と彼の映画を検討することで、ハリウッド映画が高齢男性をいかに描いているのかを結論づけようとしている。著者の分析の対象は、クリント・イーストウッドが出演しているウェスタン映画である。

ウェスタン映画は加齢を呈示するが、同時に覆い隠しもする。そうして、白人男性の老化を力と権威に満ちたものであるとして公認する。ウェスタン映画は特に、男性性、白人性、権力、金銭といったものを、加齢と結びつける。その好例がクリント・イーストウッドだ。彼は年をとりつつある男性（白人で力があり、ヘテロセクシュアルの）の楽観的なモデルであり、今でも、最も強い影響力をもつアメリカ映画ヒーローのひとりである。クリント・イーストウッドがそうした男性のなかではいちばん新しい例であるが、彼の前にも好ましい加齢というモデルを呈示した俳優はいた。ゲイリー・クーパーや、ジョン・ウェイン、ジミー・スチュワート、ランドルフ・スコットなど。ウェスタン映画の伝統は、男性身体を特権化し、追究し、そして賞賛するという機能を果たす。クリント・イーストウッドの例は、いかにしてヒーローが観客に力強い男性的エゴを感じさせるかを、鮮明に描き出している。

クリント・イーストウッドは、彼の長きにわたるキャリアにおいて、年齢を隠すことなく、むしろ美しくそれを示そうとしている。一般的に言って、人々は加齢にともなって年を隠そうとするし、男性の場合、それは彼らの男性性にも関わる問題である。ホルムランドは支配的な男性性が支配的であるのは、私たちのすべてがそのゲームに参加しているからであり、その結果、私たちは共通の恐怖と幻想を抱いていると述べている。

両性ともに、加齢にともない、身体に可視的変化を経験する。頭髮を失うこともあれば、

体重が増えることも減ることもあるし、皺が増えるということもある。加えて、ジェンダーに基づく差異もある。健康状態が良好であれば、女性は男性よりも活動的で積極的である。退職後の年配男性は、より引きこもりがちで内向的になる。一般的に、男性の寿命は女性よりも10年短い。しかしクリントは、70歳という多くのアメリカ人が退職する年齢になっても、まだ「老齡」には達していない。イーストウッドのすべての映画において、ジャンルは何であれ、クリントの年齢は目につかないし、重要でもない。彼の実際の加齢にともなう変化は、映画のなかで使う銃が大きくなるということだけだ、と著者は言う。

男性にとって、映画のなかでクリント・イーストウッドが演じる人物を観ることは、加齢という事実からの逃避である。おそらく、彼の映画のなかで、特に彼のウェスタン映画のなかでなら、私たちは皆、クリント・イーストウッドのようになれるかもしれない——力強く、支配的で、美しく年をとって、というふうに。

数十年ものあいだ（クリントの場合には今や40年になる）、ウェスタン映画には、クリントの顔と目のクローズ・アップがちりばめられていることにはほぼ変化がない。物理的には彼の身体は老化しているのだが、彼が加齢男性身体の一般的な代表だとは言えない。

クリント・イーストウッドは、青年期と老年期のあいだのあいまいな位置にうまく留まっている。その秘訣は、男性性をわかりやすく保持した（そして各部位の見た目もいい）彼の身体だけでなく、彼が他の人々に対してとる位置にもある。当然ながら、そこには観客も含まれている。クリントのような姿をしている年配の人がどれほどいるだろうか？どれほどの人が、そうなりたいと願うだろうか？

クリント・イーストウッドは、スクリーン上では不老である。実世界でそうありたいと、多くの年配男性たちが願うまさにその姿をしていると言っている。

本書において著者は、現代映画についての興味深い視点を与えてくれる。現代ハリウッドの周縁における、エスニシティ、ジェンダー、セクシュアリティといった問題を検討しているのである。このことから私たちは、昨今人気を博している映画が観客に対し、いかにして価値を反映し伝播するものであるかを知ることができる。本書の最も重要な貢献はここにあると考える。

本書では、全体を通じて、現代ハリウッドにおける多種多様な表象やイメージが興味深く論じられており、きわめて幅広い領域が扱われている。しかし、本書にはいくつかの弱点もあると考えられる。

第一に、本書では冒頭で分析枠組みが呈示されていない。著者が対象とする映画をどのように分析したのかが定かではない。確かに、100以上の映画を分析したという記述はあるが、それ以上は触れられていない。

著者は最初、1980年代、1990年代の映画に焦点を当てると言っているが、いくつかのケースでは1940年代、1950年代および1960年代の映画に遡っている。著者は、これらの映画における異なる表象について結論を述べているが、データが不足しているため、その根拠を見極めることができない。たとえば著者はラテン系女優の大半が女中の役を演じている、と言う。これは統計的に調べた結果だろうか。もしそうだとしたら、その事実が本書において述べられていないのはなぜか。同様のことがスウェーデン人の表象に関しても言える。結論を支持するための数値は呈示されていない。もし彼女の言うことが正しかったとしても、それが現実を反映しない考えだということもあり得る。こうした一般化がすべての映画に当てはまると、思い違いをして信じてしまうこともあるかもしれない。言い換えれば、著者は自身の結論に親和的なシーンを選択的に論じている。

第二に、それぞれの映画に言及する際、著者は特定のシーンは詳しく記述するものの、映画全体のあらすじは呈示していない。扱われている映画を読者が観ていない場合、全体像をつかむことはきわめて難しい。それぞれのシーンが本来の文脈から離れてしまっている。

第三に、主体のグループ化に問題がある。本書の第二部は、アメリカにおけるサブ・グループが映画でどう表象されるかを扱っている。スウェーデン系とラテン系はアメリカのサブ・グループであり、ラテン系にいたっては今日、アメリカにおける最大のマイノリティ・グループを成している。したがって、こうしたグループと、男性に暴力をふるう女性とを、同じグループに入れるのは奇妙に思われる。こうした分割は、端的に間違っていると私は考える。著者はひとつの主題から主題へと飛躍するが、同じ主題のもとで扱われている内容の間には一貫した関連性がない。

第四の点は、本書が、映画における男性性と女性性を扱うと言っているにも関わらず、それについてほとんど触れていない箇所があるということである。たとえば、スウェーデン人俳優について論じる際、著者はハリウッド映画における彼らの役割について多くを述べているが、ジェンダーに関するイメージについての言及は少ない（著者は男性についてのみ述べている）。

第五に、本書では末尾に結論が置かれていない。それぞれの部の最後に結論は述べられているが、映画産業全体についての一般的な結論が本書の最後がない。

本書が対象としているのはハリウッドだが、本書には含まれていないジャンルについても分析を加えてみるとおもしろいだろう。ハリウッド映画におけるアジア人表象、あるいはアメリカ社会において重要な位置を占めているアフリカ系アメリカ人など。

本書においては、アメリカ以外の製作についての言及がない。アメリカ人読者に対して

は独自の言語で状況を解説する本書だが、しかし、そうでない読者にとっても同じであるとは限らない。おそらくそのせいで、本書のなかのいくつかの主題は未だに私にとって不明瞭なままであり、じゅうぶんな分析がされていないという感じが残る。ハリウッドは巨大産業だが、別の産業におけるジェンダー関連の表象を同様に分析し、ハリウッドと比較してみるのもおもしろいだろう。

本書の弱点の理由となっているもののひとつに、著者がいくつかの論文を本にまとめたという背景があるように思う。主題が多様であり、必ずしも互いに関連しあっていない。

参考文献

- Higham, J., 1988, *Strangers in the Land: Patterns of American Nativism 1860-1925*, New Brunswick: Rutgers University Press.
Butler, G., 1977, "Pumping Iron".
_____, 1985, "Pumping Iron 2: The Woman".
Foucault, M., 1980, "The Confession of the Flesh," *Power/Knowledge: Selected Interviews and Other Writings 1972-1977*, New-York: Pantheon Books.

(げば やない・修士課程)